

日本語の「文体」研究の「用語」を見直す —「口語体」「文語体」と「話しことば」「書きことば」と「位相」—

西田隆政（甲南女子大学文学部教授）

1 はじめに

日本語研究には、いわゆる「文体」研究¹とされる分野がある。雑誌『日本語の研究』（日本語学会編）の学界展望では、現在でも「文章・文体」という名称が使用され、稿者自身も含めて、この分野の研究を行っていると感じる研究者も一定数存在する。

ただ、この分野に関連する研究は、近年の「役割語研究」や「方言キャラ」の研究のように、様々な方向へと展開しているものの、肝心の「文体」に関する主要な「用語」についての共通理解が十分になされていないのが現状である。「用語」の概念自体が曖昧であったり、概念の重なる用語が併用されていたり、しているのである。

本稿では、それらの見直しを行いつつ、具体的にどのような言語資料や言語現象がそれぞれに該当するのか、という点について検討する。そして、この研究は、最終的には、言語研究の研究対象とは何なのか、という問題につながるものであると考えている。

2 日本語の「文体」を考える「枠組み」

日本語の「文体」研究上の「枠組み」自体をどう考えるのか、という点が最初の課題となる。一例として、野村（2011）の例をあげる。

¹ 「文体」研究では、「文体」という概念自体が厳密に定義できていないという問題がある。「広い意味での言語表現の特徴」（『国語学研究事典』明治書院 1977 担当：遠藤好英）が比較的穏当な規定と考えられる。本稿も、この大まかな規定の立場で論をすすめている。また、文体研究では、類型的文体と個性的文体という二つの研究対象があり、本稿での「文体」は類型的文体を対象としている。たとえば「和文体」や「和漢混交文体」などがその例である。なお、「文体」研究での上記の二つの研究対象の問題点については、『日本語学大辞典』（東京堂出版 2019）の「文体」の項目に解説がある（担当：半澤幹一）。さらに、半澤は、従来「文体」として規定されていたものは、「文体」そのものではなく、文体因子であり、本稿で取り上げる、言語資料たる作品の「文章」を「文体」研究の検討対象とする際には、文体因子＝文体というとりえ方がされていたと指摘する。ここでの文体因子（文体素とも）とは、近代の「言文一致体」での「デアル体」の「である」文末のような「文体」を具現化するものとされる。

話しことば

言葉

書きことば

口語体

文語体

(p. 5)

野村(2011)の考え方は、ことばには「話しことば」と「書きことば」があるとする。さらに「書きことば」には、「話す通りに書く」に近い「口語体」と、当該の時代よりも前の時代の古典語の形式に則る「文語体」があるとするものである(pp. 10-11)。

一見して、妥当な整理であり、日本語の「話しことば」の歴史を考えていく上で、有効な枠組みとすることができる。しかし、「書きことば」に「文語体」「口語体」を設定するのは当然としても、「話しことば」には、そのような下位分類は必要ないのであろうか。この点は、今後さらに検討すべき点と考えられる。また、「口語」「文語」は使用せずに、それぞれ「口語体」「文語体」としているところも注意すべき点である。

ここで提示された4つの用語、「話しことば」「書きことば」と「口語体」「文語体」は、日本語の「文体」研究を考える上で研究の基礎となる「用語」である。以下では、この4つの用語を中心に検討を進め、補足的に「位相」という「用語」についても検討する。

3 「口語体」と「文語体」

「口語体」と「文語体」は、いわゆる「文体」研究上の「用語」であり、言語表現上のメディアの差異による「音声言語」と「書記言語」とは区別しておく必要がある。すなわち、「音声言語」は音声として発せられたもので「聴覚」によりとらえられる言語である。また、「書記言語」は文字によって書記されたもので「視覚」によってとらえられる言語である。

それゆえ、「口語体」的な「書記言語」(例：マンガの吹き出し)もあれば、「文語体」的な「音声言語」(例：原稿のある生硬な演説)もある。たとえば、後でも触れる山本(2014)での鎌倉時代の「口語」とされるものは、「書記言語」として記録された言語ではあるものの、そこに当時の「口語」的な文体としてとらえることが可能な要素があ

ることになる。

そして、この「口語体」「文語体」は、日本語の歴史研究上の言語資料において、問題とされるもので、「口語体」が同時代の「音声言語」に通じる要素を持つのに対して、「文語体」は「定型」を踏まえた「価値」の高い「書記言語」による言語表現である。「価値」とは、当該言語の使用された年代よりも以前の言語表現、あるいは、より文化的価値の高い言語から取り入れられた言語表現が保持するもので、日本語の場合は、前者は伝統的な価値のある古典作品の言語表現、後者は文化的先進地域であった、古代中国の言語表現や近代の西洋の言語表現がそれに該当する。なお、当然のことながら、それらは、日本語に翻訳されるか、日本語の中に適合しやすいように加工して導入された言語表現であり、その点への注意は不可欠である。

では、日本語史上で、具体的にはどのような言語表現を典型的な「口語体」とみなすのであろうか。一例としては、平安時代の和文作品の会話文が、それに該当すると考えられてきた²。それゆえ、『源氏物語』等の会話文が現代の小説等での会話文に準ずるものとされ、それは地の文の「語り」のようなものとは相違し、当時の「音声言語」に通じる可能性のあるものと、一般的には考えられている。それゆえ、『源氏物語』の会話文は、当時の日本語の文法や語彙を考える上での資料となるとされる。

また、奈良時代の『万葉集』については、野村（2011）で、以下のように述べられている。

しかし、事柄はできるだけ次のように単純に考えるべきであろう。たとえば、十三世紀の『新古今集』の歌は、口語体の歌とは言いにくい。それよりもさらに古い歌集（たとえば『古今集』）の伝統を踏まえているからである。『新古今集』は、当時においてすでに文語体の歌集である。ところが、『万葉集』の場合は、それ以前の権威ある古典的作品というものは、存在しない。多少の歌の伝統はあっても、真似すべき古典語（文語体）というものがないのである。（pp. 27-28）

² 山口（2006）での「ひらがな文は話しことばで書ける」の節（pp.80-83）の説明は、そのような立場からのものとして参考になる。

これについて、野村（2011）の書評である、金水（2012）は、「一種の作業仮説と捉えるなら、非常にまっとうな見解」(p.72)とする。ただ、野村（2011）も触れているように、『万葉集』の表現自体が中国の漢詩や漢語の影響を受けている（p.26）。また、「多少の歌の伝統」というのも言い過ぎではなかろうか。編纂以前に数世紀の「やまとうた」の伝統がある以上、「多少」というのは無理がある。発表者は、基本的に野村（2011）の立場は理解できるものの、「真似すべき古典語（文語体）というものが無いのである」とまで言い切るのには疑問がある³。

同じく、上代の日本語のあり様という観点から、乾（2014）は以下のように記述する。

日常のコミュニケーションにおいて発せられるような、「生活のことば」はかならずあったはずである。それを日本語あるいは和語と呼ぶならば、ほとんど書きしるす必要のないことばである。このことは、現代のわれわれの日常生活を思いえがけば、十分想像される。われわれにも、日常生活において発せられることばを書きしるさなければならない状況は、ほとんどない。われわれに残されていることばは、記紀歌謡といった歌謡の部分、つまり古事記の仮名書き部分、記紀の訓注などである。近年、木簡が大量に見つかっても、そこに日常生活におけることばが残されているものはないし、それにともなって正倉院文書の見直しが進んでいるが、それでもこの状況が大きくかわったわけではない。したがって、従来から考えられてきたように、ウタのことばの中に生活のことばを見るしか、方法はないし、それが現実と大きく異なるとも思えない。ウタことばが含まれるなど、「生活のことば」そのままではなかろうが、生活に必要な基本的な語彙はほとんどそこには含まれており、男だけの公の世界とは異なり、女性も含めて人々の「生活」がそこには認められる。（p.176）

³ ただし、規範化された日本語の「文語」というものが上代では明確に意識されていなかった、とまでは言えるであろう。その点では、『万葉集』を「口語体」とするのは、作業仮説としては有効なものと考えることができる。

乾（2014）は、野村（2011）の考え方を、もう一步踏み込んで記述したものである。「生活のことば」という「用語」を用いて、メディアとしての音声に傾斜した「音声言語」や、曖昧な点の残る「話しことば」を使わないことにより、現代の言語生活と対比しながら、「ウタ」のことばという存在から「生活のことば」が導き出せる可能性を示唆する。

稿者自身の見解は、現在の研究状況においては、「口語体」は非「文語体」として導き出されるというものである。「文語体」の研究は、文章史という言語作品の書記されたものとしての「文体」研究に委ねられる。それゆえ、「口語体」こそが当時の「音声言語」に通じる可能性があり、実際に話されたことばを推定して、そこから当時の日本語の体系を導き出していくことになる。

国学、国語学から連なる、日本語学での歴史研究において、言語資料は基本的に文献である「書記言語」である。それは当然のことながら、多くの資料において前時代からの何らかの「伝統性」「規範性」「定型性」などを伴うもので、当該時代の「生活のことば」とは乖離している。これらの資料を「文語体」と定位することで、比較的先のような要素を見出しにくいものを「口語体」とし、当該時代の「音声言語」に通じるものとして、その時代の「日本語」研究の資料として適切であると「仮設」する。たとえば、中世後期の室町時代ならば、抄物資料、狂言資料、キリシタン資料等がそれに該当すると考えられている。

「音声言語」こそが言語研究の対象であり、「書記言語」であるにしろ、そこから「音声言語」が再現可能な言語資料、かつ、当時の「生活のことば」を見出すことができる資料ならば、それは「口語体」の資料、もしくは「口語体」の含まれた資料ということになる。逆に、平安時代の漢文日記は、当時の貴族の生活に直接関係する言語資料ではあるが、「音声言語」としての再現はほぼ不可能であり、かつ、変体漢文という「定型」を借りたものである以上、「口語体」に通じる資料とはなりえない。

なお、金水（2012）は、ここで「設定」と仮称した、作業仮説であることを意識的に行うことが重要であるが、そのような研究はほとんどない（p.72）と指摘する。野村（2011）や乾（2014）のような自覚的な研究は稀であり、多くの研究は「何となく」伝統的に使用されて

いる枠組みを踏襲しているだけである。これこそが、現在の日本語の「文体」研究の現状を象徴するものであろう。

4 「話しことば」と「書きことば」

「話しことば」と「書きことば」は、まさに「用語」として見ると、「話されたことば」と「書かれたことば」をその対象とするもので、「音声言語」と「書記言語」にほぼ対応すると考えられそうである。しかし、実際の日本語研究での「用語」の運用を見ると、ことはそう単純ではない。

石黒・橋本編（2014）は、先に触れた乾論文や山本論文を含む、「話しことば」と「書きことば」に関する 13 編の論文を収載した論文集である。ここに収載された論文の研究範囲は、非常に多岐にわたるものである。現代語、方言、フィクションのことば、対照研究、歴史的研究、関連する文献研究等、いわゆる「文体」研究の枠を超えた研究論文が集められている。

編者（石黒）が「大風呂敷が広げられている」（p. v）と述べるように、研究テーマが斬新で多岐にわたるだけでなく、その目的とするところも、執筆者の研究目標といったものが、それぞれに考えられ、統一性というものはない。「話しことば」と「書きことば」のとらえ方についても、各論文が独自の問題意識を持っており、必ずしも統一されているものではない。

たとえば、山本（2014）は、「（日常）会話語」「口語」「口頭語」「俗語」の「用語」をあげて、これらが研究の際に相互の差異を峻別せずに、概念規定も曖昧なまま使用されてきたことを指摘する（p. 189）。そして、山本（2014）は、「口語」を使用して、「話しことば」を使用しない立場である。研究対象とする鎌倉時代の日本語が、「話しことば」と「書きことば」の歴史を研究する上で重要な時期（p. 188）とするものの、この研究は伝統的な「文語」と「口語」の枠組みで論をすすめる方が、先行研究との関連付けのためにも有効という立場であろう。山本（2014）は、「口語」「文語」と「話しことば」「書きことば」には、歴史的な一定の連続性を認めてよいとし、その観点から、この本に収載されていると言えよう。

「口語」と「文語」が「用語」としてすでにあるにも関わらず、「話

しことば」と「書きことば」という「用語」が使われるのは、現代語を射程に入れて研究を進める上で、伝統的な「用語」が有効ではなくなったことがその一因と考えられる。『日本文法事典』（有精堂 1981）には、「話しことば」「口語」「書きことば」「文語」（4項目担当：真田信治）のそれぞれの項目が掲出されている（pp. 23-27）。その「口語」の定義の説明で「また、「口語」は、古典語としての「文語」に対する現代語の言語体系を総称する用語として、使われることもある」（p. 24）とする。

ただ、現在では「文語」が古典語を意味する「用語」として使用されるものではなく、その結果として、現代語を「文語」に対する「口語」と定義する意味も薄らぎ、「現代日本語」という「用語」がそれにとってかわっている。「文語文法」「口語文法」という「用語」も同様に、「古典文法」「現代語文法」と称するのが通例である。

近年の日本語研究においては、歴史的研究を行う際にも、現代日本語や各地の方言、さらには他言語との対照を意識するのが一般的になりつつある。そのような中にあるのは、やはり、「話しことば」「書きことば」という「用語」がより使用しやすいということになる。ただし、これらが「文語」「口語」よりも概念として、明確なものかとなると、これには疑問が残る。先の『日本文法事典』の「話しことば」の項目には、「話しことばでも公的な改まった場での表現は、比較的書きことばに近い性格をもったものになることが多い」（p. 23）との指摘があり、これも首肯されるところである。現状において、「話しことば」と「書きことば」は、言語のメディアとしての側面と「文体」としての側面の両方から使用される「用語」なのである。

次に、現代語の「話しことば」研究の例を考えてみる。同じく、同書所収の、金水（2014）は、日常的な「話しことば」の特徴として、「1. 場面依存的 2. 逐次处理的 3. 多視点的 4. 配慮表現の必要性 5. 個人的変異」の5点を提示する（p. 3）。これらは、先の乾（2014）での「生活のことば」にも適用の可能性のあるものであるが、金水（2014）では、日常生活の「話しことば」とフィクションの中での「話しことば」を比較しつつ、検討を進めている。

フィクションの中での「話しことば」は、我々の日常会話そのものではなく、人為的に造られた作品世界用のことばである。これらには、

小説のような「書記言語」もあれば、映画やアニメのような映像から発せられる「音声言語」もある。ただし、この「音声言語」は音声によるものではあるが、その場で生成された発話としての会話文ではなく、脚本のようにすでに作られた原稿である「書記言語」の再生であると見るべきであろう。

現在では、「話しことば」と「書きことば」、「音声言語」と「書記言語」等の用語が、それぞれ交錯する形で研究が進められている。そこに、さらに、「打ちことば」という用語も提起されている。「打ちことば」は、パーソナルコンピューター（以下 PC）やスマートホン（以下 スマホ）で、メールやインターネット上の掲示板や SNS に上げられる、入力されてディスプレイ上に視覚化されたことばを指す。PC のキーボードやスマホ以前の携帯電話の入力用のキーボタンを打つところから考えられた「用語」である⁴。

同書所収の田中（2014）は、この「打ちことば」での方言の使用状況を検討している。ただ、現在、このようなインターネット上での言語の使用については、非常に流動的であり、「話しことば」「書きことば」以上に、その動向について、明確なことは言えない。しかし、「打ちことば」は、メディアとしての違いだけでなく、非常に変転が早い、ネットスラングの存在、若者とくに女性たちの発信力の強さなど、従来の「話しことば」「書きことば」とは異なった性格付けを持っており、今後の「文体」研究上、無視しえない存在である。

以上、「話しことば」と「書きことば」について、見てきたのであるが、発表者は、現時点で、「口語」「文語」は歴史的研究に限定するものとした上で、「話しことば」と「書きことば」については、仮に以下のように考えておきたい。

「話しことば」 「口頭言語」に使用されることばの性質を持つことばである。「書きことば」に「話しことば」的要素があることもある。

「書きことば」 「書記言語」に使用されることばの性質を持つ

⁴ ただし、現在のスマホでは画面上で指を滑らせるフリック入力为中心であり、「打つ」という感覚は薄れつつあり、現実には合わない側面もある。

ことばである。「話しことば」に「書きことば」的要素があることもある。

上記からも理解されるように、「話しことば」と「書きことば」は、「文体」的な側面を含意する用語である。その点では、「口語」と「文語」と同様である。やはり、メディアとしての差異からの側面は、「音声言語」と「書記言語」に委ねるのが、よいのではなかろうか。ただ、「話しことば」と「書きことば」には、「口語体」「文語体」のような「文体」としての側面を明確にした「用語」はなく、現状では、「話しことば」的要素、「書きことば」的要素とするしかない。「話しことば体」と「書きことば体」という「用語」が使用できるのか、という点については、現状では難しいとすべきであろう。

5 「位相」と「位相差」

「文体」を考える上で、ことばの使用者や使用状況への注意は不可欠な要素である。「位相」は、そのような問題を考える際に、従来日本語研究で使用されてきた「用語」である。この「位相」は、菊沢（1933）で提唱されたもので、以降、日本語の「文体」研究上、無視できないものとして、現在に至るまで使用されている。

「位相」、また、「位相差」とは、田中（1999）によれば、「社会的集団や階層、あるいは表現上の様式や場面それぞれに見られる、言語の特有な様相を「位相」と言い、それに基づく、言語上の差異を「位相差」と呼ぶ」（p.1）とされる。田中（1999）は、これまでの日本語研究での「位相」「位相差」研究の集大成とも言うべきものである。

ここでは、「性差と世代差（女のことば、子どものことば等）」「社会階層によることばの違い（宮廷・貴族のことば等）」「社会分野によることばの特殊性（専門語・学術語、文教のことば等）」「心理的要因によることばの違い（タブーと美化の心理、戦争心理・闘争心理等）」「表現様式・伝達方式によることばの違い（文章語と口頭語、詩歌のことば等）」「多人数向けのことば（新聞のことば、放送のことば等）」のような章が立てられ、非常に幅広く、これまで日本語の「位相」の問題として取り上げられた分野が提示されている。

しかし、この「位相」という「用語」の考え方に対して、疑問を呈

する立場もある。工藤（1999）は、日本語研究での「位相」という「用語」の使われ方を検討した上で、「女学生の言葉、幼児の言葉、漁民の言葉、この三つを並べてみると分かる。これらはある一つの基準で階層をなしているわけではない」（p.156）とする。これらは、その区別の要因が、それぞれ性別、年齢、特別の集団と異なっており、同列には扱えないという見解である（p.156）。そして、「位相」というのは、社会言語学における「地域方言」と「社会方言」のうちの「社会方言」に属するものであり、無理に「位相」という「用語」を使用する必要はない、という考え方を提起している（p.149）。

社会言語学の立場からも、「位相」研究への言及がある。真田編（2006）は、第1章に言語変種を取り上げて、その要因として、「属性」と「場面」とを上げる（pp.11-40）。そして、以下のように指摘する。

話し手の社会的属性によって分類できるようなことばの多様性は、日本では、伝統的に、「ことばの位相」の問題として扱われてきた。ことばの位相とは、話し手の社会的属性だけでなく、聞き手との関係（目上か目下か、親しいか初対面か）や、場面（改まった公的なものか、くつろいだ私的なものか）などによって、ことばの違いが生じている実態を示す。－中略－位相論は、ことばは一人一人違う、状況ごとに違うという観点を出発点とし、そうしたことばの違いのなかに、何らかの要因と結びつく一定の傾向性を見出そうとする点で、現在の社会言語学の方法論に通じるものである。－中略－ただし、位相論の研究自体は、日本語の変異を総合的に捉えるという方向には向かわず、個別の分野で用いられる特殊な語彙の記述を中心に展開していった。特に、文献を扱う歴史的研究において、隠語的な性格をもつ特殊な語彙（武者ことば、女房ことば、廓ことばなど）の研究が盛んに行われた。（pp.14-15）

真田編（2006）は、「位相」研究を概観して、その方法が社会言語学の方法に通じるものの、特殊な語彙の記述が研究の中心となったことを指摘する。日本語の変異を総合的に捉えるものとはならなかった点で、社会言語学とはその研究の方向性が異なっているのである。

確かに、「位相」は、言語の社会的な変異を大まかにとらえられると

いう点で、非常に便利な「用語」である。また、実際に、現代日本語話者の言語使用は、自らの立場や自らの今対している状況に即して行われている。たとえば、一人の学生を例に考えても、大学などでの学生としてのことば、アルバイト先でのことば、サークルなどでの友人とのことば、帰宅して家族の一員としてのことばなど、様々な要因によって、ことばの「様相」は異なり、それを自然に使い分けている。また、大学のゼミのような授業の中でも、教員に対するときと、同級生相手、上級生相手で、それぞれことばの使い方は区別されている。これを日本語の使用における「位相」の問題とすることはできる。

ただ、このような問題を具体的に検討していくとすると、どうであろうか。稿者は、「文体」研究上の「位相」という用語は、ことばの社会的変異の存在を示すものであり、大まかな研究分野を示すものと考えられる。先の一人の学生の例でも、たとえば、彼のアルバイト先でのことばの使用は、アルバイト先の組織の一員としてのことばであり、そこには敬語の要素もあれば、聞き手への配慮の表現の要素もある。これらのことばの変異の検討を、日本語の「位相」の研究というのは間違いではないが、それを「位相」とするだけでは、それ以上の進展は難しいであろう。

とすると、これまでの「位相」研究として積み重ねられた成果を尊重しつつも、今後は、その変異の要因を明確に規定して、日本語という言語における変異のあり様の一つと位置づけて研究を進めるべきということになる。「位相」という「用語」を使うのであれば、まず、所属する集団や年齢・性差等の言語使用者の問題なのか、堅苦しい場か気楽な場かのような言語使用状況の問題なのか、を区分しておく必要がある。さらには、同じ言語使用者の問題でも年齢と所属する集団とでは、その区分の基準が異なり、その要因には差異がある。これらの点も注意すべき課題となる。

「位相」に関する研究は、言語使用者と言語使用の実態を知る上で、重要な研究である。ただ、今後より深く研究を進めていく際には、「位相」研究の蓄積は活かしつつも、社会的な言語の変異の問題として、どのような研究をしているのかを、明確にしておく必要がある。

6 おわりに

本稿では、従来「文体」研究で使用されてきた、「口語体」「文語体」、「話しことば」「書きことば」、「位相」という「用語」について、見直しを行った。さらに、メディアの側面からの「用語」である「音声言語」「書記言語」との対比も行った。その結果として、現在の日本語の「文体」研究というところからすると、「話しことば」と「書きことば」という「用語」を使用して検討を進めるのがもっとも妥当であり、現代語研究、歴史的研究、方言研究などとの関連性を持たせる点でも有効である、ということを示した。

しかし、「口語体」「文語体」「位相」という「用語」による研究が不要というわけではない。歴史的な研究においては、その文献資料が「口語体」なのか、「文語体」なのかは、重要な論点であり、その研究の蓄積も膨大なものがある。また、「位相」ということばの変異を大まかにとらえた研究も、その研究史を無視することはできない。特に、ことばの使用者の側面の研究は、たとえば「役割語」やキャラクターの言語を研究する上などで、「位相」研究の蓄積の活用が不可欠である。

さらに、乾（2014）の「生活のことば」、金水（2014）の「日常的な話しことば」という用語も、今後、注目される必要がある。従来の「話しことば」では、実際の生活で使用されることばに対応させるのが困難だからである。「話しことば」と「書きことば」が、それぞれ、「音声言語」の特徴を帯びたことば、「書記言語」の特徴を帯びたことば、とするならば、現実の生活でのことばには、該当しない。それは、先にあげた、金水（2014）での5点の指摘のように、言語の話された場を離れては理解が困難で、逐次的に生み出されていて、視点が常に変転し、聞き手への配慮が不可欠で、話し手の個性が反映しやすいものである。

石黒・橋本編（2014）は、このような状況の中での一つの成果としての意味を持つものである。言語資料の「話しことば」「書きことば」という枠組みとその定義、さらにはその枠組みを用いていかなる研究が可能となるのかが、今後問われていくことになるだろう。

〔参考文献〕

石黒圭・橋本行洋編（2014）『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房
乾善彦（2014）「古代における書きことばと話しことば」（石黒・橋本

編 2014 所収)

- 菊沢季生 (1933) 「国語位相論」(『国語科学講座Ⅲ』明治書院 所収)
- 北原保雄・鈴木丹士郎・武田孝・増淵恒吉・山口佳紀編 (1981) 『日本文法事典』有精堂
- 金水敏 (2008) 「役割語と日本語史」(金水敏・乾善彦・渋谷勝己編『シリーズ日本語史 4 日本語史のインターフェース』岩波書店に第 7 章として所収)
- 金水敏 (2012) 「〔書評〕野村剛著『話し言葉の日本史』」(『日本語の研究』8—4 日本語学会)
- 金水敏 (2014) 「フィクションの話し言葉について 役割語を中心に」(石黒・橋本編 2014 所収)
- 工藤力男 (1999) 「〈位相〉考」(工藤『日本語学の方法』汲古書院所収：工藤 1996 「語彙論の術語〈位相〉考」『成城文藝』155 成城大学：引用は工藤 1999 による。
- 佐藤喜代治編 (1977) 『国語学研究事典』明治書院
- 真田信治編 (2006) 『社会言語学の展望』くろしお出版
- 田中章夫 (1999) 『日本語の位相と位相差』明治書院
- 田中ゆかり (2014) 「ヴァーチャル方言の 3 用法 「打ちことば」を例として」(石黒・橋本編 2014 所収)
- 日本語学会編 (2019) 『日本語学大辞典』東京堂出版
- 野村剛 (2011) 『話し言葉の日本史』吉川弘文館
- 山口仲美 (2006) 『日本語の歴史』岩波書店
- 山本慎吾 (2014) 「鎌倉時代口語の認定に関する一考察 延慶本平家物語による証明可能性をめぐって」(石黒・橋本編 2014 所収)

〔付記〕本稿は、2019 年 9 月 11 日に九州大学サテライトキャンパス（博多駅構内）で行われた、文法史研究会での発表に加筆修正を加えたものである。席上、ご教示をいただいた諸氏には、あつく御礼申しあげる次第である。